

Title	<書評> Tamsin Wilton (eds.), "Lesbian Studies : Setting an Agenda", Routledge, 1994
Author(s)	木内, 祐子
Citation	年報人間科学. 24-2 P. 359-P. 363
Issue Date	2003
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6283
DOI	10.18910/6283
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Lesbian Studies : Setting an Agenda

Edited by Tamsin Wilton, Routledge, 1994

木内 祐子

日本社会においても、最近ではジェンダーだけでなくセクシュアリティを射程に入れた研究を目にすることが多い。しかし、レズビアン・スタディーズを真つ向から包括的に論じているものはほとんどないといっているだろう。たとえ取り上げられたとしても、女性学の一部として、ほんの数ページが割かれているだけであったり、レズビアン/ゲイ・スタディーズと銘打たれ、常にレズビアン/ゲイと並列されているものの、実はゲイについてしか言及されていない。かたや、レズビアン・スタディーズはいつも「おまけ」的存在としてしか取り上げられてこなかった。そのことは、セクシユアリティ研究が進んでいるといわれる欧米諸国においても例外ではない。ここで取り上げる「レズビアン・スタディーズ・セッティング・アン・アジェンダ」は、タイトルにみられるように、レズビアン・スタディーズを正面から取り上げた数少ない研究書のひとつである。その意味で、レズビアン・スタディーズを学ぼうとする人、特にレズビアン・スタディーズを社会的立場から考えようという人にとって、数少ない必読書のひとつと言えるだろう。

著者であるT・ウィルトンは、西イングランド大学プリストル校で医療社会学や女性学の教鞭をとるかたわら、イギリス社会学会(the British Sociological Association)に所属し、ケン・プラマーらとともにジャーナル「Sexualities」の編集委員を務めている。また、過去にはレズビアンに関する著作のほかに、エイズに関する著作や、女性のヘルステアと社会政策に関する著作や論文を多数発表しており、最新の著作「Unexpected Pleasures : Leaving Heterosexuality

For a Lesbian Life” (2002) では、「なぜ女性は人生の後半においてレズビアンになるのか」という問いを立て、数多くの女性のインタビューをもとに、興味深い議論を展開している。

その表題にもあるとおり、本書の狙いは、過去の理論やその展開をふまえた上で、レズビアン・スタディーズの「アジェンダ立て」を行うことであり、この章立てそのものがウィルトンの主張する議論項目であると言ってもよいだろう。章立ては以下の通りである。

序章「レズビアンとは」

第一章「逸脱した教育法—レズビアン・スタディーズの自然」

第二章「獣の自然—レズビアンとは何か」

第三章「目に見えないものと抹消されたもの—歴史の活用と濫用」

第四章「このものを何と呼ぶか、セクシユアル・アイデンティティのモデル」

第五章「不従順であることの正当性—レズビアンとフェミニスト」

第六章「ストーリーとストーリー・テラー—レズビアン文学研究」

第七章「レズビアンが文化を研究すること—レズビアン文化を研究すること」

第八章「社会的レズビアン」

第九章「管理するための主体—レズビアンと国家」

レズビアンは、ある時は異性愛者の女性らと一緒に、そしてまたある時はゲイ男性らと一緒に、異性愛中心主義社会および家父長主

義社会に対して、異議申し立てを行ってきた経緯がある。それでもやはり、レズビアンは異性愛者女性らからは性的志向の違いによって、ゲイ男性らからは性別の違いによって、抑圧され、周辺化されることも少なくなかった。つまり、レズビアンは「同性愛者であること」と「女性であること」、その両方によって二重に抑圧され、周辺化されてきたのである。

レズビアン・スタディーズの周辺化は、アカデミズムにおいても同様であった。本書の冒頭でウィルトンも述べているように、「レズビアン・スタディーズは常に、女性学とレズビアン&ゲイ・スタディーズ/クィア・スタディーズのトンがった先の不安定な位置に置かれ、両方においても、両方を通して余白化され続けてきた」のである。

ウィルトンは、序章において、そのような不安定な位置から、これまでのセクシユアリテイ研究を批判し、再考する必要性を強く主張し、それをレズビアン・スタディーズの基本姿勢だとしている。この主張は本書の全体を通して何度も繰り返されるだけでなく、その後の“Sexualities” 2000年5月号の特集 Speaking from a Lesbian Position (レズビアンの位置から語ること) の序文においても同様のことを彼女は述べている。

第一章では、レズビアン・スタディーズを、複雑で明確なカタチがなく変化するものだとし、一貫した本質的なレズビアン・アイデンティティを脱構築するのと同様に、「つねにすでに」異性愛中心主義的の家父長主義的な社会に生きているレズビアンたちを、サポー

トするようなものでなければならぬとする。すなわちウィルトンは、レズビアン・スタディーズを、運動や理論を牽引する「こうあるべき」という「べき」論と、「つねにすでにある」コミュニティや欲望の形態として現れる「である」論との間をつなぐものであり、両者を往復しながら実践されるものとして捉えているようである。

また第二章では、「レズビアン」の辞書編纂上の定義を試みる「ことを放棄し、レズビアンを『存在 (lesbian)』というよりむしろ実践 (lesbeing)』として理解することが大切であると主張する。このような考えは、クイア・セオリー台頭以降の決まり文句になりつつあるが、ウィルトンはあわせて、ジュディス・バトラーらのようなクイア・セオリーが流行している中では、「男性権力に抵抗する立場としての『レズビアン』の政治的重要性が取り去』られてしまうのではないか」という懸念を抱いているという。

次の第三章では、レズビアンの本質主義的理解を、完全に無効にしてしまうものとしての歴史的アプローチが取り上げられる。レズビアンは、つねに歴史を超越した存在ではなく、あるときは「ロマンティックな友情」として、そしてまたあるときは「肥大化したベニスのようなクリトリスを持ったおとこおんな」として、記述されてきた。すなわち、レズビアンをどのように記述することで満たされた、ある種の政治的利害を明らかにすることが必要なのだとウィルトンは繰り返す。また、レズビアンを脱自然化することで、同様にヘテロセクシユアルをも脱自然化し、問題化することが可能になるのだと述べる。

第四章では、レズビアンのセクシユアル・アイデンティティにまつわるこれまでのさまざまな議論を整理し、アイデンティティを、繰り返される実践によつて確認し続けられる過程である、と考えるのが現在最も有効であると主張される。しかし、同様に「つねにすでにある」レズビアンたちが、ある程度の戦略的本質主義をもつて運動を展開することの重要性にも触れ、レズビアンというアイデンティティというよりはむしろ、ポジションとしての政治的重要性を著者は強調する。

また第五章では、レズビアンとフェミニズムの関係、その共闘関係と対立関係がないまぜになった複雑な関係性を記述することで、両者の差異を明らかにする試みを行い、さらに第六章と第七章では、レズビアン・スタディーズの領域横断性を示すような、文学研究とカルチュラル・スタディーズを取り上げ論じている。

第六章では、しばしば芸術が理論よりも先行することがあるとし、おもにボニー・ジマンの議論を取り上げながら、レズビアン文学批評の流れを追い、その後のクイア・セオリーにもつながる議論が整理されている。

また第七章では、カルチュラル・スタディーズのポジションからのレズビアンに対する分析と、レズビアンのポジションからの文化、そして実際にはカルチュラル・スタディーズに対する分析の両方を行うことの重要性を強調する。

次の第八章では、既存の学術領域——ここでは社会学——が、いかに異性愛中心主義的であったかを明らかにした上で、レズビアンが、

つねに「他者化」され、女性であり且つ同性愛者であることで二重に抑圧され、周辺化され、つねに無視し続けられてきたことに対する異議申し立てを行う。また、ケン・プラマーらによる社会学的視座からのレズビアン／ゲイ・スタディーズを評価しつつも、ゲイ男性がしばしば「男性であること」で手にすることのできる特権に対して鈍感になりがちであることを指摘している。

最後の第九章では、セクシュアリティ研究が、徐々にヘテロセクシュアリティの脱自然化へと焦点を絞っていく際に、欠かすことのできない社会政策へのアプローチの重要性を述べている。日本でも「中野区をゲイの区にしよう」といったスローガンとともに、ゲイを区政に送り込もうとするといった局所的な動きは見られるが、未だ具体的な政策提言には結びついていない。今後、日本でレズビアン／ゲイ・スタディーズを展開していく際には、社会政策にいかに関与させることができるかを考えてゆかねばならないであろう。その際にウイルトンの議論には、参考になる部分が多い。

あくまで概略書なので、個別の議論はほかの著作に当たらねばならないが、これまでのレズビアン・スタディーズ、またはレズビアン・スタディーズとなる以前の、レズビアンを研究対象に設定した研究、そしてレズビアンと名づけられ自らそう名乗る人々が出現する以前の彼女たちの扱われ方を知るために必要な議論は、十分まとめられていると言えるであろう。

これまでの、レズビアンが唯一、異性愛中心主義的・家父長主義的なものから自由であり、それらの規範に抵抗するポジションであ

ると考えたモニク・ウイティグら、レズビアン・フェミニズムの時代とは多少温度差はあるものの、ウイルトンは、レズビアンとて異性愛中心主義的および家父長主義的なものから自由ではないことに言及しつつも、異性愛中心主義的・家父長主義的社会の中で抑圧され周辺化されたポジションから語ることの重要性を繰り返し強調している。

レズビアン・フェミニズムの時代においては、政治的選択として選び取られるポジションであったレズビアンは、クィア・セオリーの流行とその概念の一人歩きによって、政治的重要性が取り去られた、おしゃれでかつこいこいクィアと成り果てた。しかもクィア・スタディーズの中においても、経済的・社会的特権を有するゲイ男性がヘゲモニーを握り、女性が測られ定義づけられるものとして他者化されてしまう傾向がある。さらに、ゲイ・スタディーズに主導されたクィア・スタディーズは、しばしば、フェミニズムを「悪い母親」と考えがちであり、フェミニズムがレズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズに与えた、様々な影響を無視しがちであるといえるだろう。

そのような傾向に対し、ウイルトンはあえて、クィア・スタディーズ隆盛の時代に、レズビアン・スタディーズを立てようとしているように思われる。それはまさに、あえて、である。

しかし、J・バトラーらの言うようなアイデンティティの脱構築が決まり文句となつて以来、「誰がレズビアンではない」のかを言うことは容易なもの、「誰がレズビアンなのか」を定義することはま

すまず困難になった。もちろん、「誰がレズビアンなのか」を定義しなければいけないわけではない。しかし、「誰がレズビアンなのか」を定義できない中で、レズビアン・スタディーズを立ち上げるのに、ある種の限界が感じられる。

そこでウィルトンは、アイデンティティではなく、ポジションとしてのレズビアンを呈示する。そのポジションは、「誰でもレズビアンになれるのか」というレズビアン・フェミニズムの時代の問いを再び呼び起こすことになる。その問いはまた、「レズビアンとは誰か」、そして「何によってレズビアンを定義するのか」、という問いさえも再び引き寄せてしまう可能性をもつ。

それらの問いに対してウィルトンは、レズビアンというポジションから、ヘテロセクシュアリティを脱自然化し問題化することの重要性を強調する。もちろん、レズビアンとて、異性愛中心主義的でも家父長主義的でもない真空の中に生きているわけではない。しかし、少なくともポジションとしてレズビアンであることは、女性であり同性愛者であることによって抑圧され、周辺化され、無視され、あらゆる特権から遠いところにいることとイコールである。

そのようなポジションから語ることで、これまでホモセクシュアリティを定義することでしか浮かび上がってこなかったヘテロセクシュアリティを、脱自然化し問題化することが可能になる、というのである。おそらくウィルトンは、これまで問題とされることのないかかったヘテロセクシュアリティを組上にのせることが、レズビアンの抑圧や周辺化および無視を解消するための現在もっとも有効な方

法である、と考えているのではないか。

こう答えたところで、「誰でもレズビアンになれるのか」という問いに始まる、「レズビアンとは誰か」の問いの連鎖は、完全に断ち切れたわけではない。おそらく、ポジションとしてのレズビアンと、つねにすでにあるレズビアンたちとの間の溝は、ヘテロセクシュアリティを脱自然化し問題化するという目標を達成したのちにも残るものであるうから。

今一度繰り返すと、ウィルトンの目指すレズビアン・スタディーズは、レズビアンを政治的なポジションだと捉えた上で、政治的だとは言えないレズビアンたちをもサポートするような「べき」論と「である」論をつなぎ、その間を往復する実践である。それは決して容易いことではないが、今後のセクシュアリティ研究において重要な指針のひとつとなるであろう。